

四国東部の外和泉層群から産する放散虫群集

橋本 寿夫 (徳島県土成小)・石田 啓祐 (徳島大・教養)

Radiolarian assemblage from the Sotoizumi Group in eastern Shikoku : Hisao Hashimoto and Keisuke Ishida

四国東部の徳島県羽ノ浦地域には、秩父累帯北帯の浅海性の白亜系が分布しており、下位より立川、羽ノ浦、傍示、藤川、柳淵、立江の6層に区分されてきた(中居, 1968; ほか)。今回、放散虫は最上位層にあたる立江層の凝灰質泥岩から検出された。立江層の全体的な構造は露頭が点在する小丘にあるため、不詳であるが、岩相としては、放散虫検出地点付近は泥岩及び泥岩勝ち互層、その東の丘は砂岩泥岩互層、更にその東では砂岩及び砂岩勝ち互層や礫層がみらる。マクロ化石による時代としては、アンモナイトやイノセラムス等により、Santonian~Campanianとされている(田代・松本・小島, 1982)。検出された放散虫は、*Amphipyndax stocki*, *A. conicus*, *A. ellipticus*などの*Amphipyndax*属を豊富に産し、*Dictyomitra multicostata*, *D. tiara*, *D. duodecimcostata*, *Archaeodictyomitra simplex*, *Stichomitra communis*, *Cryptamphorella sphaeria*, *Patellula planoconvexa*, *Pseudoaulophacus* cf. *lenticulata*, *P.* cf. *floresensis*, *Diacanthocapsa* cf. *ancus*などに特徴づけられる。これら各種のレンジの重複をみると、early Campanianに最も集中している。また、これら放散虫産出点付近からは、*Gaudryceras* cf. *tenuiliratum*, *Inoceramus* cf. *schmidti*, *I.* cf. *balticus*等のマクロ化石が知られており(中居, 1968ほか)、これらによる時代は、Campanianであり、上記放散虫群集

の時代とはほぼ一致する。一方、今回の放散虫群集の種構成を他地域の群集構成と比べてみると、権佐古層の放散虫群集(Okamura *et al.*, 1982)、四万十帯北帯のCampanian群集(須鍋, 1986)、和泉層群の放散虫群集(山崎, 1987)などと共通する種も多い。特に和泉層群の放散虫群集と比較すると、当地域の上記放散虫群集は、diagonal ridgeなどの明瞭なpore frameを持つ*Amphipyndax*属が産していないことから、山崎(1987)の*D. koslovae*群集帯の下位に相当する可能性がある。